

須恵町議会行政視察報告書

須恵町議会 議長 松山 力弥 殿

行政視察を行ないましたので、下記のとおり報告いたします。

報告日：令和7年12月11日

報告者：文教厚生委員会 男澤 一夫

委員会名	議員名
文教厚生委員会	男澤・白水・三上・川原・平山・(松山議長)
視察研修先	視察研修日
大垣市	令和7年10月8日
視察研修の目的 (テーマ)	大垣市の子育て世帯の現状について 大垣市の子育て支援について 大垣市における子どもの居場所づくりの取組みについて
視察概要	「こどもんち」について 「みんなの食堂」について 大垣市こども未来条例の制定について オンライン不登校対策事業について 仮想空間(メタバース)の活用について
主な質疑応答	Q) 大垣市こども未来条例を制定されており、子どもの健やかな育ちを支える取り組みの章の中に、地域住民等の役割も明記されています。理解を得るまでの経緯をご教示ください。 A) 地域の理解を得るための工程は特別に行っていない。 Q) メタバースのシステム構築費用を教えて下さい。 A) システム費用年間40万円 一度に50名利用可能 Q) みんなの食堂はどのように運営しているか。 A) ボランティアを募り、こども食堂として、子どもは無料だが保護者や大人には協力金として200円~300円を頂いている。 Q) 「こどもんち」の考え方。 A) 「つどえる場所」と「ほっとな場所」として居場所のエリアを捉え、家庭や学校とは異なる人間関係や環境で安全に仲間と過ごせる場、また一人で自由に過ごせる場、すなわち、子どもたちが主体的に過ごすことができる場であること Q) オンライン不登校対策の手応えは。 A) 始めたばかりで何とも言えないが、少しづつ利用する子どもを増やしたい。

<p>所 感</p> <p>(課題と町政への活用など)</p>	<p>こどもまんなか応援サポーター宣言のなかで、「ずっとずっとたくましく生きることをはぐくむための環境づくり」「子育て日本一を実感できる仕組みやマインドづくり」「こどもと一緒に取り組むまちづくり」を大きく三つ掲げられて子育て支援をされています。こども未来条例を施行し、子どもが子どもらしく成長し、暮らすことが出来る環境づくり等、子どもに特化した施策が沢山有り、これからを担う子どもたちの居場所も沢山用意されていて、須恵町への必要性を強く感じた。</p> <p>メタバースは最後の手段として考えておられ、家庭から入る子、グループで入る子もいる。不登校の学校復帰が目的ではなく、家から出ることが第一ステップと考えている。</p> <p>子どもたちへの支援への予算をしっかり組んでいる。</p> <p>対応職員の方々が説明時に熱い思いを抱いて、取り組まれていることが、伝わってきたのでなぜですかと尋ねると、市長の思いを実行しています。とのことで、職員一人一人に、市長の思いが浸透していることの証だと感じた。</p> <p>市長をはじめ市職員の熱意と行動力を感じた。財政規模など一概に比較は出来ないが、取り組み内容、経緯などをしっかりと把握しつつ、習う所はしっかりと習い、町ならではの取り組みが何か出来ないかを模索検討していきたい。</p> <p>不登校対策として、国の補助事業を活用して、年間40万円程度という低コストでメタバースを導入・運用している点は費用対効果が高く、素晴らしい事例だった。居場所が単なる遊び場としてだけではなく、子どものSOSをキャッチし、子ども家庭センター等へ繋げる重要な機能を持っていると感じた。</p>
<p>その他</p>	<p>大垣市の子育て世帯の現状 大垣市の出生数が昭和48年度 2758人 令和6年度 918人と50年で66.7%減少 18歳未満親族のいる世帯は昭和55年 21,689世帯、令和2年 14,547世帯で世帯数が33%減少、核家族世帯 14,406世帯 11,661世帯、割合が15%増加 全国の共働き家庭の推移は40年で2倍に増加</p>

須恵町議会行政視察報告書

須恵町議会 議長 松山 力弥 殿

行政視察を行ないましたので、下記のとおり報告いたします。

報告日：令和7年12月11日

報告者：文教厚生委員会 男澤 一夫

委員会名	議員名
文教厚生委員会	男澤・白水・三上・川原・平山・（松山議長）
視察研修先	視察研修日
岐阜市	令和7年10月9日
視察研修の目的 (テーマ)	子ども・若者総合支援センター“エールぎふ”的取組について 設立の経緯や支援体制、職員体制、予算規模について及び校舎の再利用について
視察概要	“エールぎふ”は、社会の変化による子どもや若者に関する問題の複雑化・多様化に対応するため、平成26年4月に創設。支援を必要とする子ども・若者やその家族教師などのあらゆる悩みや不安を、専門家や関係機関と連携し、ワンストップで総合的・継続的に支援。平成31年4月より「子ども家庭総合支援拠点」を設置。 令和4年4月「こどもサポート総合センター」を設置、令和6年4月「こども家庭センター」を設置。 ・0歳から20歳前までの子ども・若者に関するあらゆる悩みや不安の相談に対応 ・ワンストップで総合的に相談・支援 ・発達段階に応じて継続的に支援 5つの係がご相談に対応 (1) 乳幼児相談・支援係 (2) 家庭児童相談係（こども家庭センター） (3) 発達支援係 (4) 教育支援係 (5) 才能伸長・自立支援係
主な質疑応答	Q) エールぎふの取り組みの中で、義務教育を終えた子ども（若者）への支援があり、学習しようとする土台づくり、学習しようとする習慣づくりができるようにする支援とあります。具体的にはどのような支援ですか。 A) 自己肯定感低い子が多い→関わりの中で自己肯定感を高めたり、安心して自分を出せる居場所となったりする。発達検査などを通して、特性（得意と苦手）について自己理解が出来るようになる。→「学習したい」「学校へ行きたい」「働きたい」という意欲を引き出す→目標のためにできることを、一緒に考えていく→スマートステップで目標設定していく、できたことを成長として認めていく。定期的な来所で、その子の応じた学習を一緒にしていく→学校参観や情報共有によって、できていること成長していることを認め励まし学校への配慮のお願いや助言によっ

	<p>て、所属先でもできることを増やし認められ、自己肯定感が上がっていくようになります→継続的な学習意欲へ</p> <p>Q) 市役所との連携をどう図っていますか。</p> <p>A) ・設置後10年以上経過した現在では、市役所の関係部署には、エールぎふが子どもの相談先として認知されています。このため、子ども支援課や生活福祉課などに来所した保護者のうち、子どもの療育状況が心配と思われる事例については、当該窓口から家庭児童相談係に連絡があり、職員が本庁の窓口に出向き、相談対応を行うケースもあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・毎月開催する要保護児童対策地域協議会に市民病院の小児科医に参加いただいており、虐待が疑われる児童のほか、特定妊婦ケースも含めた情報共有を行っており、必要な場合は、病院で産科医、病棟看護師も含めたケース検討会議も行っています。 ・福祉部の重層的支援推進室が実施する会議に参加し、庁内の関係部署とともにケース検討を行うことで課題解決につなげるとともに、顔の見える関係づくりに努めています。 <p>Q) 窓口先の周知はどのようにされていますか。</p> <p>A) ・学校、保育所、保健センター等の関係機関・窓口にリーフレットを配布し周知を図っています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・併せて、市の関係課（子ども支援課、障がい福祉課、保健センター、地域保健課）などが作成する冊子やチラシなどに掲載していただくことにより、エールぎふの周知を図っています。 <p>Q) 子どもたちへの周知活動などは行われていますか。また、どのように行われていますか。</p> <p>A) 市内の公立小中学校に貸与しているタブレット端末で、朝の会と帰りの会において、子どもが心の健康状態を報告する「ここタン」というアプリでは、子どもが相談したい教員を選ぶことができる仕様になっていましたが、令和5年からは・子どもが相談したいときに押すボタンに「学校以外の人に聞いてほしい」ボタンを追加し、ボタンを押せばエールぎふ「子どもホットダイヤル」の番号が表示されるように改良し、子どもが相談しやすい環境を整備し、各学校で教員から児童生徒に周知している。</p>
所感 (課題と町政への活用など)	<p>関連機関が一か所の集まっている連携ルームが有ることで、事案の情報の共有化が同時に出来て、即対応可能であり、このような発想はなかなか出来ないと思うが、実施しているので、少しでも近づく施策を考えて提案していきたい。</p> <p>安心できる居場所、信頼できる人がいる、心にささる対応と言われたことが、大事でありすべてに共通していると感じた。</p> <p>「エールぎふ」は0歳～20歳までの支援をワンストップで行う多職種連携拠点で、体制は支援の縦割りではなく、教育・福祉・児童相談所や警察も常駐する「子どもサポート総合センター」運営は現代にとって理想的な施設だった。</p> <p>不登校の支援については特例校との連携に加え、市内4か所の郊外教育支援センター（自立支援教室）を設置し、不登校の子どもの心境の変化に合わせた居場所を提供し、子ども主体の支援として素晴らしいと感じた。</p>

	<p>問題行動を「不安や苦しみの表現」と捉え、安心できる居場所と信頼できる人を持つことで、落ち着き回復へ向かうそうだ。</p> <p>保護者支援として、ペアレントトレーニングを実施し、「親が変われば子も変わる」という認識のもと、保護者の不安や苦しみに寄り添い家庭への波及効果を狙う取り組みは感銘を受けた。</p>
その他	<p>5係の才能伸長・自立支援係は最終の対応ですが、20歳を過ぎても支援している。解決までの伴走は出来ない、先の機関へ繋げていく。</p> <p>子どもが小さい時期は親への支援、親が変われば子も変わる。</p> <p>家族を支える施設。</p> <p>相談事は、自殺のDMが多い、小学生、中学生から。</p> <p>市以外からの電話もあり、対応している、非通知が多い。</p> <p>家族関係の悩みが多い。</p>

須恵町議会行政視察報告書

須恵町議会 議長 松山 力弥 殿

行政視察を行ないましたので、下記のとおり報告いたします。

報告日：令和7年12月11日

報告者：文教厚生委員会 男澤 一夫

委員会名	議員名
文教厚生委員会	男澤・白水・三上・川原・平山・（松山議長）
視察研修先	視察研修日
岐阜県北方町	令和7年10月10日
視察研修の目的 (テーマ)	学びの多様化の取組みについて ・「オンライン1（学びの多様化校）」について ・民間不登校児童生徒支援施設利用者支援補助金について ・学級担任と児童・生徒・家庭をつなぐホットラインについて ・ランドセル支給等について
視察概要	オンライン1 基本方針 だれもが世界に一人だけのかけがえのない存在 学習内容を自分で選び、自分のペースで学習ができる、新たな仕組みの学校にする 形態：北方町立北学園分教室（南学園の生徒も転籍して町内全入学可） 設置場所：令和5年に廃校となった旧北方西小学校体育館 生徒数：定員：8年生3人 9年生3人 計6人程度（学園の3部） 教職員：専任教諭2人 兼務教職員9人（副校長、教頭、各教科の教諭）
主な質疑応答	Q) 北学園8年生、9年生のみオンライン1対象だが、入室希望者人数は。入室審査会では、どのような審査をしているか。 A) 初年度は希望した9年生6人全員が入室した。 今年度は8年生3人、9年生4人が希望し、全員が入室した。 対象者の要件を①心理的要因等により、連続又は継続して30日以上欠席した生徒、②欠席が30日未満の場合でも、不登校の傾向がみられる生徒、③学びの多様化学校分教室「オンライン1」の目的を理解している生徒、としており、その内容を申請書や副申書によって審査している。 Q) 民間不登校児童生徒支援施設利用者支援補助金の仕組みは。 A) 文部科学省より学びの多様化として指定を受けており、かつ、北方町と連携協定を結んでいる民間不登校児童生徒支援施設（現在は揖斐川町にある西濃学園のみ）を利用した場合、1世帯につき、施設の年間授業料の半額を限度として補助し

	<p>ている。1年お4期に分け、各期末に実績に応じて請求していただき、受給する手続きである。</p> <p>Q) 役場や学園との連携はどう図っているのか。</p> <p>A) オンリー1の先生方の机が北学園の職員室内にもあり、毎日学園へも行き来している。町教委では、主幹兼指導主事がオンリー1担当として様々な連絡や調整を行い、学園及びオンリー1との連携を図っている。</p> <p>Q) 授業を減らし、新設教科を創設して問題はないか。</p> <p>A) 特別の教育課程の編成にあたっては、削除する教科等及び補完方法について分野ごとに示して文部科学省の承認を得ています。授業数を減らし、学校生活に余裕を持たせることで、学習意欲の向上を図っている。</p> <p>Q) ランドセル支給は新入学児童の何%か。支給を望まない方への対応は。</p> <p>A) 北方学園に入学する児童については全員支給。</p> <p>特別支援学校に入学する児童については希望を調査し、不用な場合は相当の商品券を支給している。私立学校へ進学する場合は、ランドセルや商品券の支給はない。</p>
所感 (課題と町政への活用など)	<p>子育て支援のメニューが沢山有り、様々な環境の方へ対応できる体制を整えてあるのに、居場所づくりは模索中とのこと。子どもたちへ心のこもった対応をされていることを強く感じた研修だった。子どもたちへの熱い思いは見習うべきと考える。須恵町にも子どもたちが行きやすい居場所が必要と考える。</p> <p>不登校生徒において生徒一人ひとりに学校が、合わせるという体制は登校時間や下校時間の柔軟な設定、授業時間の削減により、生徒が心理的・時間的ゆとりを持って学習にのぞめる環境を作り出していた。また、個人研究や町をPRするパンフレット作製、マンホール蓋のデザインの提案など社会参加を促す活動は、生徒にとって町民としての役割、自信を与えていた。</p> <p>オンリー1では、環境を変えさえすれば、また豊かな生活を送れそうな生徒に絞り、しっかりフォローしていくことで、確実に日々の生活や友達関係に悩む生徒を減らしていくという明確な考えがあり、町でも廃公民館など公共施設などを利用していくけば、十分に学びの多様化に対応できると考えられる。一人ひとり何が問題で、どんなフォローが必要かをしっかり見極める必要があり、この視察の経験を活かし、何かアクション出来ることはないかを考えていきたい。</p>
その他	<p>北方町の思いや考え、誰一人取り残さない施策。</p> <p>オンリー1に合っている子を選出している。審査を重ねて人選している。</p> <p>臨床心理士から研修を教員が受けている。</p> <p>つながりが大事、時間差登校、放課後登校、訪問、全生徒と繋がっている。</p> <p>各居場所、出来た事をほめている。</p> <p>分教室にすると、建物基準が緩くなる。今後増えていく予定で考えている。</p> <p>低学年から、多様化している状況。</p> <p>お姉さんの姿を見て、妹さんも通うようになった。</p> <p>先生の選考は、校長が見て選出する。</p> <p>面積は全国の市町村で9番目の小ささ。</p> <p>町の雰囲気は須恵町とあまり変わらない。</p> <p>オンリー1、8年生=中学2年生、9年生=中学3年生</p>